

探究 3·11 之後在日本文化中形成的「異鄉」 —透過用心傾聽受災地區人們的心聲—

曾 秋桂

淡江大學日文系 教授

摘要

3·11 將日本一分為「受災地區」與「非受災地區」的兩個區塊。且權力分配上，明顯產生地方(東北地區)與中央(東京首都)的對峙。易言之、3·11 震災之後，日本東北的「受災地區」在日本社會當中，被形塑成特殊的區域，包含文化形態上也逐漸形成一個日本獨特的「異鄉」風貌。

本論文主要目的是透過受災戶的真正心聲，解析因 3·11 震災形成日本文化中「異鄉」的實情。長期赴災區取材而編撰成書的《即使如此、還活著。NHK 採訪小組聽到的受災戶 3000 人的真正心聲》(2012 年 12 月 NHK 報道局社會部著、イースト・プレス)與『原發避難災民控訴的日記』(2013 年 3 月和田武士・北澤拓也編、明石書店)兩本貼近災民近距離採訪的書籍當考察的標的。

考察結果顯示、3·11 造就許許多多層次意義的「異鄉」，也讓許許多多的受災戶，雖然人身在故鄉卻是個異鄉人的結果。如此充滿多層次意義的「異鄉」，撕裂了後 3·11 時代的日本社會，甚至日本文化的形態，造成日本社會難以撫平的族群間的傷痛，成為後 3·11 重建過程中，須面對以及克服的重重關卡。

【關鍵字】 3·11 受災地區 非受災地區 異鄉 多層次意義

受理日期：2014.03.03

通過日期：2014.05.23

A "foreign land" in the Japanese culture borne by 3.11 earthquake disaster: While hearing disaster victim's frank view

Tseng, Chiu-kuei

Professor, Tamkang University

Abstract

In Japan, the "stricken area" and the "non-stricken area" have been divided by 3.11. The northeastern "stricken area" is placed on the topos of a "foreign land" in Japanese society after 3.11 earthquake disaster.

This paper has explored the reality of the "foreign land" in the inside of the Japanese culture formed by 3.11 earthquake disaster from the voice of the disaster victim of a "stricken area." Data are two works, "Soredemo ikiru. NHKshuzaihan ga kiita hisaichi3000nin no koe" by NHK and "Genpatsu hinanmin dokoku no noto" by Akashisyoten. Each of these works is interviews for a disaster victim.

In conclusion, 3.11 have induced a "foreign land" with a multistory meaning, and it can be said that many hometown loss persons are produced. The "foreign land" with such multistory meanings is severe trials of damages which have shakes the Japanese society and its cultural form of post 3.11, and Japanese must overcome it.

【Keywords】 3 · 11, stricken area, non-stricken area, foreign land, multistory meanings

3・11 震災によって形成された日本文化中での「異郷」 —被災者の生の声に耳を澄ませつつ—

曾 秋桂

淡江大学日本語学科 教授

要旨

3・11により、日本では「被災地」と「非被災地」と分断され、地方(東北)対中央(東京)の対峙は一層明確になった。いわば、3・11震災後、東北の「被災地」は日本社会の中で異なったトポスに置かれ、文化形態を含む「異郷」の形成がますます顕著化されたのである。

本論文の目的は、3・11震災によって形成された日本文化中での「異郷」の内実を、「被災地」の被災者の生の声から探って見ることにあつる。長期にわたり、数多くの被災者に現地取材し、纏めた『それでも、生きる。NHK取材班が聴いた被災地3000人の声』(2012.12、NHK報道局社会部著、イースト・プレス、以下『それでも』と略す。)と『原発避難民慟哭のノート』(2013.3、和田武士・北澤拓也編、明石書店、以下『原発避難民』と略す。)の2作をテキストにした。

結論としては、3・11は重層的意味を持つ「異郷」を生み、多数の故郷喪失者を産出したと言えよう。こういった重層的意味を持つ「異郷」は、ポスト3・11の日本社会ないし文化形態を含む日本文化を縦横断するかつてない試練であり、それを潜り抜けなければならない。

【キーワード】 3・11 被災地 非被災地 異郷 重層的意味

3・11 震災によって形成された日本文化中での「異郷」 —被災者の生の声に耳を澄ませつつ—

曾 秋桂

淡江大学日本語学科 教授

1. はじめに

2011年3月11日14時46分に日本が未曾有の「三位一体の受難」¹(地震・津波・原発事故)に見舞われたことを、正式に「東日本大震災」(2011.3.11、通称3・11)と言う。3周年を迎えようとする今日も、被害収拾のメドは立っておらず、事態は深刻になる一方である。

3・11直後、家族の視点から日本社会の研究に取り組んだ真鍋弘樹は、3・11により、日本では「被災地」と「非被災地」²とがくっきりと分断され、東北地方では助け合う「災害ユートピア」³が形成されたと指摘している。それに、中央観点による東京発信のローカルメディアが報道した3・11震災の様子に東北の被災者が覚えた違和感⁴と、変らぬ東京中心主義⁵が相乗し、地方(東北)対中央(東京)

¹マニユエル・ヤン(2012.2)「負債資本主義時代における黙示録と踊る死者のコモンズ」河出書房新社編集部編『歴史としての3・11』河出書房新社 P93では、「3・11における三位一体の受難(地震/津波/原発事故)は死の覚悟をわたしたちに植え付けた」とある。

²真鍋弘樹(2012.4)『3・11から考える「家族」』岩波書店 P28では、「東日本大震災の津波は、家族を分断し、被災地と非被災地の間にも分割線を引いた」とある。

³前掲同真鍋弘樹著書 P33では「災害ユートピア」の語源について、「米国のノンフィクション作家、レベッカ・ソルニットが提唱した概念だ。東日本大震災の三ヶ月前に邦訳された同名の著書『災害ユートピア』(亜紀書房)が出ている」と触れた後、P34では「常識的には、大災害が起こると秩序が失われ、治安も悪化すると考えられがちだが、悲惨で痛ましい災害時には「人々が助け合い、協力する、即席の地域社会」、つまり相互扶助的で利他精神にあふれた「ユートピア」が姿を現す」とその意味を明確に説明している。

⁴瀬名秀明(2012.3)「時間と希望」『3・11から一年100人の作家の言葉臨時増刊号』文藝春秋 P119では、「東北の人々はおそらく震災直後から数ヶ月間にわたるマスメディアの報道に違和感を覚えていただろう。(中略)東京の心象が強く反映されたものであって(後略)」とある。また、小池真理子は「失われた言葉」と題し、同書 P167では「今も仙台に親しい友人が何人かいる。彼女たちは口をそろえて、「非被災地の人々たちは、津波や地震ではなく、原発のことばかり言うようになり、温度差を感じる」と言ってきた」と触れている。本論文のテキストとしたNHK報道局社会部著(2012.12)『それでも、生きる。NHK取材班が聴いた被災地3000人の声』イースト・プレス P179では、被災者の鈴木が「原発の影響のない地域と私達とで、ものすごく温度差を感じます」と実感している。

⁵『朝日新聞』(2011.4.28)に掲載された小熊英二が東京中心主義についての意見である。

の対峙は一層明確になった。いわば、3・11震災後、東北の「被災地」は日本社会の中で異なったトポスに置かれ、文化形態を含む⁶「異郷」の形成がますます顕著化されたのである。

前述の論調に示唆され、3・11震災によって形成された日本文化中での「異郷」の内実を、「被災地」の被災者の生な声から探って見ることを、本論文の目的とする。3・11を体験した複数の日本国民の声を纏めた『3・11から一年100人の作家の言葉臨時増刊号』

(2012.3 文藝春秋)『東日本大震災99人の声あの日のわたし』(あの日のわたし編集委員会 2011.11・初 2011.10 星雲社)は確かに後世に参照されるべきだが、一方、「被災地」の被災者たちの生の声を纏めた著作の少ない中、長期にわたり、数多くの被災者に現地取材し、纏めた『それでも、生きる。NHK取材班が聴いた被災地3000人の声』(2012.12、NHK報道局社会部著、イースト・ブレス、以下『それでも』と略す。)、『原発避難民慟哭のノート』(2013.3、和田武士・北澤拓也編、明石書店、以下『原発避難民』と略す)⁷は、より被災者の気持ちに一層寄り添うことが出来る資料と思われ、この2作をテキストに3・11震災によって形成された日本文化中での「異郷」の内実を検討することにした。

2. 「被災地」の被災者たちの実況

2011年の1年間、岩手、宮城、福島の前被災3県の、県外への転出者が転入者を上回る「転出超過」者が4万人を超えた⁸ようである。また、「今(2012年12月のこと・論者注)もって明日への希望を見いだせない34万人の避難者、なかでも、福島県は広大な地域が放射能に汚染され、全町村あげて避難を強いられたまま、県内に9万8千

⁶「今野秀則さんのノート」(2013.3.11) 大和田武士・北澤拓也編『原発避難民慟哭のノート』明石書店 P74 では、「地域を根こそぎ破壊され、歴史、文化、民俗、習慣、伝統芸能、祖先崇拝、住民同士の絆など一切合切を奪われたのだ」と今野秀則が述べたことと同じ主旨である。

⁷『それでも』は、協力者延べ3000名以上に上り、震災後2週間、1ヶ月、2ヶ月、3ヶ月、半年、1年の計6回にわたって行われ、収集した資料である。一方、『原発避難民』には、2011の年末から震災1年後の2012年3月までの期間に、子どもからお年寄りまでの計83人から貴重なメッセージが寄せられたが、紙幅の関係で、51名の方たちの手記しか掲載されていないという。

⁸前掲真鍋弘樹著書 P66-67

人、県外に5万8千人の計15万6千人の住民が避難している」⁹という。「今(2013年1月のこと・論者注)福島県内で原発関連死は1121人、自殺者は公式発表で14人にのぼっ」¹⁰たそうである。「被災地」の事態の深刻さは、「非被災地」の想像を遙かに超えている。なお、本論文で言う被災者たちとは、県外に移住した者をも含めて指す。また、避難生活をする場合、「原発事故で今(2013年2月の時点・論者注)も約16万人が避難生活を送る。そのうち約6万人が県外避難だ。生きていくため、働き手は福島県内に残って働き、子どもと母親だけが県外で暮らす「二重生活」¹¹も見られる。例えば、沖縄の恩納村に移住した被災者の「7割が一般的な家族、残りの3割は母子家庭」¹²で、「子どもへの放射線の影響を懸念し、母子だけでの移住を決断する人たちが多かった」¹³という。そこで、新しい日本家族の形態が3・11によって生まれたと言えよう。

3. 『それでも』に現れた「被災地」の被災者たちの生の声

『それでも』は、「NHK記者が向き合った被災者の一年」(3名)、「NHK東日本大震災1年アンケート」記録(重複した1名を含む22名)の2部に分けられている。表(1)はその詳細である。

表(1)『それでも』の詳細

	題名	作者	キーワード
第1部	①すれ違う家族の“幸福”像、それでも養殖にかける想いの中に	宮城・女川町・高泉元幸・(被災時26歳)	幸福観の変化／家族／原発の恩恵／被災者と復興／風評被害
	②母の最期の言葉かみしめ、もがき、苦しみ続けた一年	岩手・大船渡市・志田由紀(被災時48歳)	家族の溝／原発報道の減少／復興の困難さ
	③原発事故の“がけっぶち”故郷、一人草刈続け、見る夢は	福島・広野町・鈴木正範(被災時65歳)	故郷・家族／原発への憤り／復興と若者／帰郷拒否と放射線
第2部 (自由記述の抜粋)	No1 名取市・井上由美・(44歳)	宮城県	希望のなさ
	No2 気仙沼市・千葉三千代・(42歳)		被災現実拒否
	No3 仙台市・大湯正志・(57歳)		生きることと後世に伝えること
	No4 七ヶ浜町・渡邊よしえ・(67歳)		家族の絆

⁹前掲大和田武士・北澤拓也編書 P72

¹⁰門馬昌子「もう浪江には帰らない」前掲大和田武士・北澤拓也編書 P143

¹¹前掲大和田武士・北澤拓也編書 P5。また、吉田邦博(2012.12)「福島現地からの実態報告」本間慎・畑明郎編『福島原発事故の放射能汚染問題分析と政策提言』世界思想社 P60では、「子どもを県外に避難させたまま父親だけが戻っているケースも多い」と同じ現象を指摘している。

¹²前掲大和田武士・北澤拓也編書 P262

¹³前掲大和田武士・北澤拓也編書 P262

No5 気仙沼市・女性匿名希望・(50歳)		幸福の真意
No6 仙台市・佐々木直子・(24歳)		生きる意味への理解不可能
No7 仙台市・佐々木直子・(24歳)		他人の善意
No8 釜石市・女性匿名希望・(50代)	岩手県	生きる力
No9 宮古市・田中和七・(57)		希望
No10 大槌町・千葉孝幸・(47歳)		生き地獄の人生への悲嘆
No11 大槌町・千葉孝幸・(47歳)		深い悲しみ
No12 釜石市・匿名希望女性・(32歳)		分裂した自分の心
No13 山田町・倉本三和・(43歳)		他人の善意
No14 陸前高田市・斉藤正彦・(37歳)		故郷への愛着
No15 陸前高田市・匿名希望女性・(50代)		分裂した自分の心
No16 匿名希望男性・(20代)		別居した妻への恋しさ
No17 郡山市・匿名希望男性・(28歳)		他人の冷たい目の怖さ
No18 川内村・匿名希望女性・(30代)	福島県	帰郷した年寄りと帰郷したくない若い世代
No19 南相馬市・鈴木枝美子・(33歳)		被災者の孤立／帰郷した年寄り と帰郷したくない若い世代／除染の無用論
No20 川内村・匿名希望男性・(50代)		分裂した自分の心
No21 浪江町・松本知子・(55歳)		失うものの多い悲しみ
No22 浪江町・匿名希望女性・(57歳)		恐怖感

説明 1. 「No」は、通し番号を意味する。以下同様である。

説明 2. 網掛けは、共通項を強調する意味である。以下同様である。

表(1)に整理した第1部のキーワードでは、「家族」、「復興」、「原発」が共通項として取り上げられる。それに対して、第2部の記録からは「PTSD」¹⁴、「帰郷」、「差別待遇」、「除染」などの問題が浮き彫りにされた。以下敬称を略し、下線部分は論者による。

3.1 第1部の共通項——「家族」、「復興」、「原発」

1人目の高泉は「震災で家族それぞれにとっての、“幸せ”の価値観が変わってしまった」(P41-42)と言い、「家族が幸せなのが一番の幸せです」(P42)と実感した。そして、娘を助けて、「生きるよ！バンザイ！」と言い残して死んだ母の言葉を噛み締めて悲しんでいた2人目の志田は、「悲しみの根深さは、生じた家族の溝をなかなか埋めてはくれなかった」(P85)と言い、妹と父との溝を修復中である。

¹⁴斎藤環(2008)『文学の断層』朝日新聞出版 P198 では、「震災を契機として有名になった言葉の一つに、PTSDがある。人はショッキングな出来事や烈しいストレスを経験すると、しばしばその経験がトラウマ(心的外傷)となって残る。PTSDとは、そのトラウマの存在からさまざまな精神症状が生じて日常生活にも支障を来す病気である。(中略)時に「解離」といって、心の中に断裂が走り、現実感が希薄になったり、記憶が飛んだり、別人格になったりするような症状を伴うこともある」と説明している。

3人目の鈴木は、もともとは4世代7人家族だったが、目に見えない放射線が「お化けにおびえるようなもの」(P129)のため、敢えて子供・孫に「戻ってきて欲しい」(P129)と言えず、家族がばらばらとなった。ここでは、家族が崩壊する兆しが見える。

また、復興に関して「行動しないことには復興は進まないことを身をもって伝えようとしているように見えた。被災者こそが復興の主演なのだ」(P49)と若者の高泉が意味深長な発言をした。若者を必要とする復興について、鈴木は「コミュニティは老若男女そろって初めて維持できるもの。若者が戻って来なければ復興はありえない」(P132)と同じような見解を示した。ただ、「「復興」と言うものは、一直線の坂道を上るように単純には進んでいかない。起伏を繰り返しながら少しずつ失った日常を取り戻していく、途方にくれるような作業なのだ」(P105-106)と志田は感慨深く指摘した。

復興に必要とされた若者が帰郷を躊躇う理由の1つは、原発事故による放射線漏洩の問題である。「原発神話、長い間共生という言葉で今日まで東電と地域住民が築き上げてきたものが、これほどの副産物(放射能)を残す形で崩壊するとは誰も予想していませんでした。確かに想定外という地震の大きさであったことは理解できますが、柏崎の時以上に、その後の対応のまずさ、マスコミへの正確な情報の提供不足、そして何より政府と東電の最高責任者が地域住民に誠意をもって詫びることがほとんどないという事実に腹が立ちます」(P120)と憤慨した鈴木の気持ちは分かるが、「原発が税収を生み、雇用を生む。財政が強いから震災のあとも、国の措置を待たずに漁港のかさあげ工事をすることが出来た。原発のカネで作った体育館も避難所になった、原発があってよかったという面は確かにあるんですよ」(P27-28)と高泉が言った原発の恩恵を受けたことも確かである。福島県の原発立地については、開沼博が「六〇年に県から原発立地の打診、六一年に大熊町が誘致促進を議決し」¹⁵、「自発的な服従」

¹⁵開沼博(2012・初2011)『「フクシマ」論原子カムラはなぜ生まれたのか』青土社 P271

¹⁶だと指摘した。福島が原発の起源から積極的に原発発電所を招致し、原発の恩恵を受けた点とも関係するためか、3・11以降、原発事故による放射性物質が飛散した際、「自分たちは被害者である」¹⁷と反応した首都圏の人々は少なくなかった。だが、こういった東北地方は、真鍋弘樹が述べたように、「戦前から一貫して、東京への低廉な労働力の供給地だった。戦後はさらに、集団意識や出稼ぎ労働者を提供し、都市人口を膨らませた分、過疎というかたちで自らの身を削った。「効率化」「集約化」の果てとしての日本社会の形」¹⁸を支えている。このような東北地方対東京中央の状況に赤坂憲雄は「まだ植民地だったんだ」¹⁹と目を見張っている。その事情を見極めて、真鍋弘樹が「原発事故の発生とそれによる福島県の人々の苦難に、自分たちもまた関与している、という加害の意識」²⁰を欠いてはならぬと良心的に反省している。このように、歴史上の深い関連から見ると、簡単に「被害者」と「加害者」のような二項対立の図式で東北地方と東京中央との関係を置き換えて説明しきれない複雑な事情が実は潜んでいるのである。今回の放射線漏洩をめぐる「被災地」と「非被災地」との違った見解は、東北地方と東京中央との溝をさらに深めていくに違いない。

3.2 第2部の焦点とされた問題——「PTSD」、「帰郷」、「除染」、「差別待遇」

「生き地獄のような、人生最大、最悪な1年」(No10 P161)、「激動な1年」(No12 P165)、「何にも無い空っぽな一年」(No20 P181)などは、被災者が3・11後の1年を振り返ってみた感慨である。その中で、「心が震災当時のままで止まっている」(No12 P165)、「前へ進みたいと思う自分と、心が一年前の3月11日でとまってしまっている自分と、体の中に2人同居しています」(No15 P171)、「心は3月11日で停まっています」(No20 P181)のような「解離」症状を

¹⁶前掲開沼博著書 P298

¹⁷前掲真鍋弘樹著書 P89

¹⁸前掲真鍋弘樹著書 P21

¹⁹赤坂憲雄(2011)『「東北」再生』イーストプレス

²⁰前掲真鍋弘樹著書 P89

訴えた PTSD(心的外傷後ストレス障害)に罹った被災者がいる。また、帰郷をめぐって、「本気で帰りたいがっているのは年寄りばかり。若い世代のほとんどは、帰るには数年単位の時間がかかると覚悟している」(No18 P177)、「お年寄りの「早く帰りたい」ばかり。私達世代は、早く帰りたくも、解除されても帰れない理由がある」(No19 P179)と言ったように、年寄りと若世代との深刻な対立が覗かれよう。帰れない理由の1つに除染の無用を挙げて、「今の除染は全く意味のないと思います。下手にお金をかけず、半減期を待つことはできないのでしょうか。除染除染とさわげば、他県の人達はちゃんと除染されているんだと勘違いし、解除後も帰れない私達を不思議に思うでしょう。更に国がムダなお金を使えば使うほど、国民全体が福島県、県民を非難するのではないですか?」(No19 P179)と述べて、「被災地」と「非被災地」との感情を引き裂くことにつながると注意を呼び起こした。「被災地」に赴き、放射線を調査した山本節子が除染が所詮「一時的な気休め」²¹だと述べた論調は、被災者が発した生の声の正当性を裏付けている。

そして、たとえ被災者が何らかの理由で帰郷を選ばずに、「異郷」への移住を選んだとしたら、「避難先で人に冷たくされたことがあった。一度、ガソリン給油を断られたことがあった。いわきナンバーの車で他県を走る時は、他人の目がこわかった。郡山にきてても子供がいじめられるのではないかとこわかった」(No17 P175)と白い目で見られた被災者の心細い心情が披露された。このように、帰郷しても、「故郷」が元の故郷ならぬ「異郷」となり、第2故郷のつもりで「異郷」に移住しても、「異郷」はいつ経っても自分を受け入れてくれる「故郷」にはならないことを「被災地」の被災者が味わった故郷喪失の悲哀である。

²¹山本節子(2012)「フクシマ放射能調査レポート」本間慎・畑明郎編(2012.12)『福島原発事故の放射能汚染問題分析と政策提言』世界思想社 P27。なお P25-26 では、「除染」とは放射性物質を移動させるだけの「移染」で、問題解決にはつながらないし、扱いによってはことを複雑化してしまう。(中略)「除染」はいわば、政府が、人々を福島に縛り付けておくための方策であり、決して環境浄化につながるものではない」と説明している。また、畑明郎は同書 P149 では、チェルノブイリ原発事故被害地を例に「除染よりも避難や移住をさせ」ることを提言した。

このように、放射線をめぐる「被災地」と「非被災地」との認識の懸隔²²と、「災害ユートピア」と可視化された「被災地」での、帰郷をめぐる「被災地」の被災者間の意見齟齬²³は、3・11以降に様々な分割線で切断された日本の姿を如実に物語っている。

4. 『原発避難民』に現れた「被災地」の被災者たちの生の声

次に、『原発避難民』は、「なにも終わってはいない、なにも始まってもないー浪江町原発避難民3人の2年間」と題した第1部と、「原発避難民48人がつづる震災の記録」と題した第2部に分けられている。表(2)はその詳細である。

表(2) 『原発避難民』の詳細

	題名	作者	キーワード
第1部	① 東日本大震災顛末記 ② 希望は捨てたくない。 だが、厳しい現実 ③ 二度目の冬を向かえて	福島・双葉郡浪江町・今野秀則・(元県庁職員65歳)	放置された故郷／放射線の怖さ／ 帰郷／復興の困難さ
	① 無事に明日が来るか、 誰にもわからない ② 現羽津事故で避難している者からあなたへ	福島・双葉郡浪江町・菅野みずえ(主婦59歳)	放射線の怖さ／見捨てられたこと ／善意／復興の困難さ／災害ユートピア／差別待遇／政府と東電への憤慨／帰郷
	① 想定外の人生になってしまった ② もう浪江には帰らない	福島・双葉郡浪江町・門馬昌子(主婦69歳)	故郷／原発への怒り／帰郷／放射線の怖さ
第2部	① あの日から変わってしまった人生 (No1-12)		放射線への恐怖／帰郷拒否／復興の困難さ／避難生活の仲間との絆／ ／原発安全の崩壊／将来への不安 ／国の再生の責任／生きること／差別待遇
	② 原発・放射能について 思うこと(No13-34)		放射線への恐怖／帰郷／差別待遇 ／原発の存続／善意への感謝／東北人の気質を誇り
	③ 気持ちを奮い立たせて(No35-48)		怖放射線への恐怖／帰郷／差別待遇 ／原発の存続

表(2)に整理した第1部のキーワードでは、「放射線の怖さ」、「復興の困難さ」、「帰郷」、「政府と東電への憤慨」、「差別待遇」が共通項として取り上げられる。第2部からは、「放射線への恐怖」、「帰郷」、「差別待遇」、「原発の存続」などの問題が浮き彫りにされた。

4.1 第1部の共通項の課題

3・11を境に故郷喪失者になった「被災地」の被災者たちは、例えば、故郷に「戻るつもりでいる」(P77)今野のような人でも、「戻

²²前掲山本節子論文 P23 では「被害者とはいえ、立場の違いによって反目や分裂、さらに深刻な対立が起きることは珍しくないが、住民が一本化して当然の原発事故で、このような分裂が発生しているのは不気味だった」とある。

²³前掲山本節子論文 P23 では、「この不安は、「避難派」と「残留派」のあつれきから生じているという」とある。

らない家が多く、地域コミュニティの再生は至難の業だ」(P76)と、復興の困難さを意識した。突き詰めて言うと、「放射能の恐怖は相当期間残存する」(P76)ことへの意識である。また、「国にも県にも見捨てられた浪江町民の現実」(P87)を何度も咀嚼した菅野は、「仮設に住んでローンを返す暮らしはなんとも理不尽」(P98)や「この高い線量値では、すぐに帰れるといわれても3万ベクレルの畑で何が作れると言うのでしょうか」²⁴(P98)や「ご先祖様から預けられ未来の人へ手渡すはずの故郷でした。未来の人への預かりものをこんな形で汚された理不尽さ」(P98)などの理不尽なことを挙げて、政府と東電に責任を取ってもらうように強く要請した。勿論、「悲しいことに福島バッシング。県民お断りとか、いわきからはお断りとか、福島県のあなた、近づくなと言われたり。それだけに避難所ではお互いを身近に感じしていました」(P91)と白い目で見られた被災者たちの悲哀が、かえって「災害ユートピア」での被災者同士の絆を強めていた。「ぜいたくを言うなと外からいさめる声もあります。でも何も悪いことをしたわけではありません。自然災害でもありません。防げたはずの、でも防ごうとしなかったことで起こった原発事故です。防ごうとしなかった人たちは家もあり仕事もあり、もうからなくなったこと以外何も困ってはいません。町民に落ち度はなかったのに突然、投げ出されてしまったのです。」(P111)と、「非被災地」の人たちに非難された「被災地」の被災者は、悲鳴を上げていた。一方、「被災地」も、「不幸はたまたま福島だけに起こり、福島でも浜通りの一部のことと受け取られてはないでしょうか。福島のなかでも「勝手に原発を受け入れた町が被害者面して、事故起こされて迷惑な。賠償金受け取ってもうけたらろう」と避難民に向かっていう福島県民もいないわけではありません。現にそう言いはなれました。いわ

²⁴神山修一「福島のダブルバインド」河出書房新社編集部編(2012.2)『歴史としての3・11』河出書房新社 P125でも、「福島の住民はダブルバインド的な状況に置かれている。放射能に汚染された土地の被害者として、怯え、身を慎み、直ちにこの地を去れと要求されると同時に、その場に踏み止まり、他の土地に一切迷惑をかけることなく復興に励めと命じられ続けているのだ」と政府の矛盾を突いた。

き以外の浜通りは原発乞食、クズ、惰民と」(P112)と、「被災地」の福島県の中でも、原発立地の浜通りと浜通り以外の地域が細分化され、被災者同士の紛争は絶たない。また、移住についても、「既存の町のなかに違う町を受け入れられる余裕はないのが現状ではないか。一人ひとりが帰属性を失い、素の個人となって違う町の住人とならなければ生きていけないのではないかと、そんな風に押し流されていくのではないかと。それが嫌だから、危険な町であってもどこかであきらめて、不安を押し殺し何とか希望をかき集め、元の町に戻ろうとしているのではないかと、と考えこみます。どちらをとってもつらい選択をしなければならなくなっています」(P113)と、移住地に融け込めないことに悩まされる一方、帰郷の難しさにも気づいた。「帰れない我が家がそこにある町。同時に、町を捨てたのではないのになぜ、私はここにいるのかと悲しくなります」(P115)「国策難民」²⁵が、「今までの原発政策が何をもたらしたのかという生き証人」(P119)としての覚悟を固めたのである。

同じ「海も山もあり自然豊かな」(P139)浪江町住民の門馬は、「浪江にはもう帰らない」(P147)が、「原発事故でみんな失われてしまいました」(P141)と痛感し、「すべての原発を廃炉にする、それが人生を狂わされた私たちの悲願だ」(P136)と言い、「私たちのような悲劇に日本のどの地域の人たちも遭わないようにするために、すべての原発を廃炉にするまで、がんばりたい」(P148)と意志表明した。

地震、津波に伴う原発事故のため、ポスト3・11のありとあらゆる問題、放射線漏洩、エネルギー対策、復興再建、賠償、仮設住宅の建設、除染、住民の帰郷などに対応しきれない政府と東電は散々に非難されてきた。そうした中、ただ原発の「加害者」と「被害者」を基準に区切られた「被災地」と「非被災地」、さらに被災地において細分化した「原発立地(浜通り)」と「非原発立地(浜通り以外)」とは、被災後の日本島に住む人々の感情を引き裂き、被災者への差別・偏見を深刻化し、社会を不安定にさせるばかりである。原発が

²⁵前掲大和田武士・北澤拓也編書 P9

引き起こした混乱を目にした熊谷達也は、「自然が本当に試そうとしているのは、被災地の外にいる人々の人間性のほうなのである」²⁶と示唆したが、原発事故が起きた途端、いきなり「加害者」から「被害者」²⁷へと豹変した自治体関係者の人間性も疑われるべきであろう。要するに、原発の持つリスクを省みず、原発が生んだ経済効果の恩沢ばかりを追求しようとしてきた近代的人間の貪欲さこそ、事態の深刻化をさせる最大の悪の根元に相違ない。

4.2 第2部で再検討すべき問題

前項目の第1部で取り上げた問題と重複しないように、ここでは、放射線の恐怖と情報公開への切望、差別と偏見、日本民族の気質と東北人としての誇り、原発の存続問題の4点に触れることにする。

4.2.1 放射線の恐怖と情報公開への切望

「目に見えない放射線に対する不安や恐怖は消えません」(No19 P215)、「目に見えない放射性物質への恐れは消しようがない」(No23 P221)と訴えた被災者もいれば、「色も香もない放射能というものが本当にあるのだろうか疑問に思」(No26 P226)ったり、「5月に入ってから放射能の恐ろしさを知らされて次々に避難し」(No18 P214)たりする被災者もいる。目に見えない放射線に怯えている被災者の置かれた状況が思い知られる。そして、「原子炉から放射能は出しっ放しであります。そんな大熊町には数十年帰ることが出来ません。大熊町は元の姿に戻れるでしょうか。私は絶対に無理だと思います」(No17 P213)と、事態の恐ろしさに直面した被災者の覚悟が見られる。また、「先の見えない原発の放射能汚染は、直接的に見えないし、痛みも感じない、避難先から帰ってきた人たちは、避難していることにくたびれて、どうせ先も短いし、20年先のことだからどうなってもいいと、あきらめているお年寄りが多い」(No27 P227)そうである。目に見えない放射線の恐怖に怯えながら、「なによりの恐怖は、

²⁶熊谷達也(2012.3)「自然によって試されているのは誰か」前掲文藝春秋臨時増刊号 P113

²⁷前掲山本節子論文 P34 では、「原発立地を了承した自治体にも汚染責任があり、その自治体が、完全に被害者のような顔で語ることは許されない」とある。

原発のまさに「想定外」の爆発が起こってから、少ししかない情報のなかを「逃げ惑った」ということではないか」(No3 P162)、「詳細な情報の開示により、我々自身が何かを考えて、行動できるのではないか」(No16 P209)と考え、「開かれた情報の開示と、確実に効果のある方法により、福島の子どもたちを守っていただきたいと思います」(No16 P210)と切望した被災者の心情を汲むべきである。

一方、原発安全神話の崩壊後、「現在も「Fukushima」に住み続ける者にとって一番不幸なのは、自分を取り巻く状況や日々のさまざまな情報について、たとえそれが正しいものであっても、素直に信じることをためらいながら生活せざるを得なくなった」(No28 P229-230)と言い、「与えられた情報が信頼できないうえ個人が考え続けるには限界があり、真剣に捉え注意しようとするほど疲弊してしまう」(No28 P230)との被災者の悩みも尽きない。その中で、故郷への愛着を捨て難く、「放射能の恐怖はこれからずっと消えることなく私たちの生活につきまといますが、大好きな福島で、精一杯頑張っていこう」(No43 P255)、「東電第一原発が爆発して大量の放射線物質を撒き散らしましたが、避難せずにこの場所(原町区)に残って除染や復興の手助けをして、早くもとの状態に戻るようにしたい」(No45 P256)と放射線に見舞われた「被災地」に残るといふ人生の道を選択した被災者も確かにいる。

4.2.2 差別と偏見

原発事故により放射性物質に見舞われた「被災地」は特別扱いされ、「非被災地」の目が気になる被災者がいる。例えば、「福島県人ということでも何かしら後ろ指を指されるのかもしれない、首都圏では原発事故の話はタブーなのかもしれない」(No9 P190)、「東京の大学に入ったりしたら南相馬市出身だと差別されたりしてしまうのではないか」(No31 P235)、「福島の大学出身ということでも毛嫌いされるのではないか」(No40 P253)、さらに「結婚するとき相手の親御さんにこと断られてしまうのではないか」(No31 P235-236)のようである。いずれも「かもしれない」、「のではないか」の未確定な

言い方で心配事を述べたが、前節で述べた被災者が「差別待遇」を受けた実体験と照合すれば、被災者の心配を完全に否定するわけにもいかない。また、事情があり、他県に避難できないが、「差別・偏見もつらいです。「子どもがいるのに避難しなくてよいのか？」と非難されたり(もちろん心配して言ってくださる方もいらっしゃいますが)、ネットでは「福島」の子どもを避難させないのは児童虐待だ」ということも言われたりしていて、胸が痛みます」(No31 P235)。被災者はそれに対し、「今(2012年1月、論者注)南相馬にいる親たちの多くは、精いっぱい家族を守りながら、その一方で、不安や葛藤を持って、放射能と闘っていると思います。なので、あまり非難や差別をせずにあたたく見守ってください」(No31 P236)と悲願を切り出している。

4.2.3 日本民族の気質と東北人としての誇り

未曾有の原発事故に対して、悲嘆や憤慨や怒りが専らに寄せられた被災者の声の中で、「今度の災害で1つだけよいこと、希望がありました。それは日本人という民族のすばらしさです。こんなに思いやりがあり誠実で勤勉な民族は世界中でも少ないでしょう。だから必ずこの大災害を乗り越え、震災以前より素晴らしい国になると信じています。我々も1日も早く生活再建を果たすことが社会に対する恩返しだと思います」(No10 P195)と、社会階層の対立を超えた意見が格別に心を暖める。また、「最後に我々被災者に真摯に援助の手をさしのべてくださった社会のみなさまに心から感謝申し上げ、この受けた御恩を我々もまた誰かにお返しいたします」(No10 P195)と、頂いた善意を広げていく所存が素晴らしい。さらに、「東北の人たちは我慢しないで声を張り上げて主張しなくてはいけないと激励してくださる全国の方たち、ボランティア、日赤からの義援金、本当にありがとうございます。東北人は御恩を忘れません」(No11 P200)と、「非被災地」から寄せてくれた暖かい支援、善意に感謝し、東北人が決して恩知らずではないと言い表せることが感心である。

4.2.4 原発の存続問題

「どんな災害があろうとも万が一ミサイルを打ち込まれても原発は壊れない」(No8 P177)と教育されてきた原発事故が起き、收拾のつかない問題が山積している中、当然原発の存続問題が盛んに議論されるべきである。それについて、被災者の間でも意見が分かれている。

「今、原発の再稼動の話が各地であります、とんでもない話です。この前、インタビューされていた女性が原発が止まれば、仕事なくなる、生活ができなくなるなんて話をしているのをテレビで見ました。いい加減に目を覚ませとりたいです。我々の姿、我々の故郷を見てみろ！と言いたいです。日本人は平和ボケしすぎです！我々は被災者ではなく被害者なのです。東京電力と民主党に一刻も早く道筋をつけてほしいです。がんばっぺ！ふくしま！」(No13 P204-205)と反対な意見がある一方、「少なくとも原発を誘致を行った地元民や原発のあったおかげで県も潤い、町も企業も大なり小なり安定をした。生活を送る人たちも住んでいたことは事実です。私もその1人です(原発作業員)(中略)あの浜通りには原発がなければ、陸の孤島と、なっていたと思います。若者はそれこそ町を捨て都会へ出ていき、人口は減り、税収はなく、出稼ぎ労働者も多くなっていたと思います。原発の再稼動には、私個人としては賛成ですね。ただし新しく建てることには反対です」(No22 P218)と原発の再稼動に賛成する意見も出されている。

2013年の8月に入り、「資源エネルギー庁幹部は7日午後、東京電力福島第1原発の敷地内から1日あたり約300トンの汚染水が海に流出しているとの試算を明らかにした。同幹部によると、3日に今回の試算内容を確認したという」²⁸との報道が流れ、その後21日の原子力規制委員会の報告で「本件の特定原子力施設から漏れいし

²⁸ロイター「福島第1の汚染水、1日300トンが海に流出と試算＝エネ庁2013年08月7日」
<http://jp.reuters.com/article/topNews/idJPTYE97605B20130807>(2013年9月7日閲覧)

た放射能の量は、(中略) 数千テラベクレル程度(Mo-99 換算)」で、これは「施設における放射線バリアと管理」に関する基準でレベル3に相当する」ことが発表された²⁹。3・11の3周年を迎えようとする去る2014年の2月22日にも、高濃度の汚染水100トンが溢れ出た問題が報道された³⁰。

また、3・11以後、原発事故の現場でトップとして対応の指揮を執った福島第一原発発電所長吉田昌郎が2011年12月食道ガンに罹ったと診断され、2013年7月9日に亡くなったのは、記憶にまだ新しい³¹。こうした現状では、「原発事故で逃げる私達の行く先は、暗いところか、明るい場所か、放射線の怖さを知るのはこれからだと思う」(No21 P217)と言う被災者の声は一層リアルに感じられる。3・11を体験し、3・11の1周年を迎えた2012年3月16日に亡くなった日本戦後思想家吉本隆明は原発存続問題について「反原発で猿になる」とし、「それは人間が猿から別れて発達し、今日まで行ってきた営みを否定することと同じなんです」³²と述べたが、その発言は世間を驚かせ、日本社会でも大きな波紋を呼んできた。科学技術の進歩、文明の発達にのみ重点を置き、極端な例を挙げて原発擁護者として発言していると思われるが、2013年夏以来の一連の事件を見て、「制御できもしないものを、できるとおごった企業の責任はもっと糾弾されてしかるべきです」³³と、「地震列島でいつ巨大地震が起こるかわからない日本。人間の手で制御できない原発、事故がなくても危険な放射線廃棄物をどんどん出していき、最終処分場も決まらない原発」³⁴と叫んで苦しんでいる被災者の生の声に耳を澄ま

²⁹第19回 原子力規制委員会(平成25年8月21日(水)10:30~12:00) 会議資料 http://www.nsr.go.jp/committee/kisei/data/0019_08r.pdf(2013年9月7日閲覧)

³⁰<http://www.asahi.com/articles/ASG2P625TG2PULBJ00Q.html>「朝日新聞デジタル」(2014年3月1日閲覧)

³¹現代ビジネス「再稼働ムードの中「日本を救った男」吉田昌郎元所長(東京電力福島第一原発)がんで壮絶死」(2013年07月19日(金)フライデー) <http://gendai.ismedia.jp/articles/-/36480>(2013年9月7日閲覧)

³²(2012.1)『週刊新潮新年特大号』新潮社

³³「菅野みずえさんのノート」前掲大和田武士・北澤拓也編書明石書店P98

³⁴「門馬昌子さんのノート」前掲大和田武士・北澤拓也編書明石書店P136

せるとすれば、「知の巨人」³⁵と言われた吉本隆明は、果たしてどのように応えるのであろうか。

5. 結論に代えて——被災者たちにとっての「故郷」と「異郷」

「地方と中央」で結ばれた東北地方と東京中央との関係が始まって久しい。開沼博によると、「明治以来、中央への電力供給元となってきた福島県への恩返し」³⁶としての地域振興策の申し出はその一つであるという。東北地方にとっては、原発立地を誘致したことは、「東北チベット」、「福島チベット」³⁷から脱出する道の一つである。しかし、この打開策が3・11によってかえって東北地方の破滅を招きかねない契機となった。地震、津波に伴う原発事故のため、「どんな災害があろうとも万が一ミサイルを打ち込まれても原発は壊れない」(No8 P177)と宣伝された「原発安全神話」は「想定外」³⁸で崩壊し、ありとあらゆる問題に直面しなければならない日本の現状は、代々日本島に住み続けてきた日本人にとっては、まさに「異郷」でしか言い表せない違和感であろう。また、3・11以前、「地方と中央」を維持してきた東北地方と東京中央との共生共栄の関係は、原発事故のため、「被災地」と「非被災地」あるいは「被害者」と「加害者」の図式に還元され、互いに批判対立するようになった。「被災地」は「非被災地」にとってまた「異郷」であるに相違ない。そして、「異郷」と特別視された「被災地」では、被災者が助け合う「災害ユートピア」が形成された。また、放射線のため、「故郷」を離れ、他県に避難した「被災地」の被災者は他県で白い目で見られ、故郷喪失者となった。全ての避難した被災者が白眼視されるとは一概には言えないが、「故郷を離れた子どもたちのかえる場所も奪われたのです。次はどこに故郷を作るのですか」(No10 P194)と被災者の声に表象

³⁵土井淑平(2013.1)『知の虚人・吉本隆明戦後思想の総決算』星雲社 P10

³⁶前掲開沼博著書 P147

³⁷前掲開沼博著書 P175 では、これらの言い方は「いつ頃から使われだしたかは不明であるが、多くの資料に共通して見出される自己表象に象徴される」とある。

³⁸前掲真鍋弘樹著書 P12

されたように、「異郷」は自分を受け入れてくれる「故郷」にはならない。こうした深い悲しみは、故郷喪失者の身になって見ないと分からないであろう。かといって、「故郷」に留まる被災者の目に映る「故郷」も、目に見えない放射線の被害を蒙った、元のままの「故郷」ではなく、いわば「故郷」ならぬ「異郷」となってしまったのである。さらに、「故郷」に留まる被災者の間でも、「被災地」を「原発立地(浜通り)」と「非原発立地(浜通り以外)」に区別し、今まで原発の恩恵を受けてきたかどうかによって互いに非難し合う紛争も絶えない。引き裂かれた同郷者にとっての「故郷」の意味もまた変質してしまうのではないか。

このように、3・11は重層的意味を持つ「異郷」を生み、多数の故郷喪失者を産出したと言えよう。こういった重層的意味を持つ「異郷」は、ポスト3・11の日本社会ないし文化形態を含む日本文化を縦横断するかつてない試練であり、それを潜り抜けなければならない。国籍を問わず、今、日本が直面した厳しい局面を目のあたりにした人類は、一人の人間として出来る範囲で事態をさらに悪化させないことを日々、真剣に考えるべき分岐点の時代を迎えたのではないか。

(本論文は、輔仁大学日本語文学科による「2013年度輔仁大学日本語学科国際シンポジウム「文化における異郷」(2013.11.16)で口頭発表したものを修正、補足したものである。同時に、102年度国科会補助専題研究計画(NSC102-2410-H-032-079-)による成果の一部である。)

テキスト

NHK 報道局社会部著(2012.12)『それでも、生きる。NHK取材班が聴いた被災地 3000 人の声』イースト・プレス

大和田武士・北澤拓也編(2013.3.11)『原発避難民慟哭のノート』明石書店

参考文献

(一) 書籍・機関論文

- 斎藤環(2008)『文学の断層』朝日新聞出版
- 赤坂憲雄(2011)『「東北」再生』イーストプレス
- 開沼博(2012・初 2011)『「フクシマ」論原子カムラはなぜ生まれたのか』青土社
- 茂木健太郎編(2011.5)『わたしの3・11』毎日新聞社
- あの日のわたし編集委員会(2011.11・初 2011.10)『東日本大震災 99人の声』星雲社
- 財団法人日本統計協会編集(2012.1)『統計で見る日本 2012』財団法人日本統計協会
- (2012.1)『週刊新潮新年特大号』新潮社
- 河出書房新社編集部編(2012.2)『歴史としての3・11』河出書房新社
- (2012.3)『3・11から一年 100人の作家の言葉臨時増刊号』文藝春秋
- 真鍋弘樹(2012.4)『3・11から考える「家族」』岩波書店
- 本間慎・畑明郎編(2012.12)『福島原発事故の放射能汚染問題分析と政策提言』世界思想社
- 土井淑平(2013.1)『知の虚人・吉本隆明戦後思想の総決算』星雲社

(二) インターネット資料

1. 「第19回 原子力規制委員会(平成25年8月21日(水)10:30~12:00) 会議資料」
http://www.nsr.go.jp/committee/kisei/data/0019_08r.pdf
(2013年9月7日閲覧)
2. 現代ビジネス「再稼働ムードの中「日本を救った男」吉田昌郎元所長(東京電力福島第一原発)がんで壮絶死」(2013年7月19日(金)フライデー)
<http://gendai.ismedia.jp/articles/-/36480>(2013年9月7日閲覧)

3. ロイター「福島第1の汚染水、1日300トンが海に流出と試算＝
エネ庁2013年08月7日」
<http://jp.reuters.com/article/topNews/idJPTYE97605B20130807>
(2013年9月7日閲覧)
4. <http://www.asahi.com/articles/ASG2P625TG2PULBJ00Q.html> 「朝
日新聞デジタル」(2014年3月1日閲覧)